猿新聞

編集責任者
山村　準
tel:0595-63-1725
Email
jyun.y@asint.jp
名張鳥獣害問題連絡会

発行部数
【全戸回覧】
錦生地区：100部
赤目地区：150部
箕曲地区：70部
ひなち地区:200部
つつじが丘:440部
【全戸配布】
国津地区：380部
市民センター:90部
（9地区）
名張市議会:20部
名張市役所:20部

野生鳥獣とのかかわり方

この20年余り、日本列島で起きている環境変化のひとつに、野生動物が農村集落や地方都市に出没し、活動を活発化させていることが挙げられます。

野生鳥獣による農作物の被害は年々深刻化するなか、大型動物との遭遇による人身事故・交通事故などが多発するなど、人の安全・安心が脅かされています。

中山間地域が自律的に持っていた防御システムが過疎・高齢化により徐々に人為的な圧力が失われて機能しなくなりつつありますが、獣害対策は、自分たちの生活を守る上では、欠かせないことといえます。しかし、現在行っている対策が最善か?これでいいのか?、という思いを抱くのは私だけでしょうか。

増え続ける野生鳥獣。増え続ける被害。

こうした現実のなか、人口減少・高齢化が進むなかで、今問われているのは、私たちの豊かな自然や暮らしを守るために、野生鳥獣とどのように付き合えばよいのかということと思います。

人と野生鳥獣の関係は人類が誕生してから現在まで途切れることなく続いていて、今後も隣り合わせの生活は永遠に続きます。鳥獣害対策を含め野生鳥獣とどのように付き合うかが、いま、考えるべき時期にさしかかっています。

人間と野生鳥獣の長い歴史を振り返って見ると、人間は自然界の動物や植物に依存してきた経緯があります。それが、ここ数十年という短い期間に、自然界を人間が征服するという関係の変化が起き、依存型から征服型へと大きく形態が変わってきて野生鳥獣と人間との間に軋轢を生む原因となっています。人間が野生鳥獣のエリアを犯したということです。

このことにより、野生鳥獣の生活領域は大きく減少し、今まで、広大なエリアで面的に生活していたのが「点」でしか生活できなくなり、その「点」となった生活領域が、人間の生活する集落と急激に接近してしまったということです。

鳥獣による被害を減らす対策には、防護柵の設置・駆除や、環境整備など、いくつかの方法が考えられますが、いずれにしても二者択一的な方法論では決して解決するものでありません。増えすぎた野生鳥獣（在来種）については、駆除することもやむを得ないといえますが、闇雲的駆除であってはならず、保全や棲み分けを図る上での非常手段と考えるべきだと思います。

尚、計画的・適正な「間引き」は種の保護、保全にもつながるということを念のために申し添えておきます。

但し、外来種については、全て駆除することが原則です。

今、人間の領域と野生動物の生息地を切り分けて、野生動物を殺さずに、共存する施策が求められています。そのためには、接近し過ぎた山林と農地の間に見晴らしのよい緩衝地帯を設け、更に彼らが棲むことのできる自然の環境を復元することが必要です。

本来は絶妙なバランスで保たれていた生態系が人間の介入によって大きく崩れ、人間自身の生活が野生鳥獣によって脅かされる結果となっているということを胆に銘じるべきです。

今ある獣害の深刻化を突き詰めて考えるとき、意図・非意図に関わらず、人間の活動が大きく影響していて人災と捉えてもいいのかも知れません。

野生鳥獣に関わる問題を解決するということは、野生鳥獣と人がどのような関わり方を持つべきかを考えることからが始まりです。

排除するのではなく、野生鳥獣との安定した共存の道を選ぶことが、長い目で見て人間社会にとって最も多くの利益を生態系から受けるということを理解することが重要になります。

自然に親しみ、野生鳥獣の生きる姿を知ることにより、野生鳥獣に対しての理解も深まり、獣害対策だけでは解決できない、根本的な課題の解決につながっていくのではないかと思います。

フォーラム

平成30年12月15日、「獣害につよい三重つくり」と題したフォーラムを開催されました。

名張鳥獣問題連絡会からも4名が参加。

平成３０年度の知事表彰団体が決定。

三重県知事表彰団体（１団体）

伊勢寺地域環境保全向上活動をする会（松阪市）

取組内容

地区内を6つに分け、柵や箱わなの管理、草刈り等の維持管理体制を構築し活動しています。特に柵の管理は10年近く実施しており、地域全体で獣害対策に取り組んでいます。

基礎的な対策も確実に実施されていることに加え、捕獲の効果検証のための夜間パトロールの　実施など、他団体で取り組んでいない独自の活動を行っています。

研修会（フォーラム）

「集落の絆で生活環境整備活動を」

講師・岐阜県鳥獣被害対策広域指導員　酒井義広 氏

「平成の鳥獣害は災害です」

イノシシは、土木災害。

シカは、植生破壊。

サルは、生活環境破壊。

カラスは、公害。

「一策　皆で！」

『住民主体の生活環境整備活動として』

住民の情報共有と危機感の醸成。

里人活動として意識改革と合意形成。

生活環境整備として総参加型で計画的実践。

「二策　囲って！」

『鳥獣侵入防止柵の設置活動』

侵入は山から川から道路からと変化するので柵は完全ブロックに、周年設置する。

簡易門扉と目隠しネットを効果的に設置。

「三策　除いて！」

『鳥獣の侵入と安住間を阻止』

獣の餌場、潜み場解消のため、遊休・耕作放棄地、河川敷等の草原化防止。防草シートによる除草地の減少化。

「四策　追い切って！」

『鳥獣害の人馴れ防止』

人馴れ防止で有害鳥獣の追い払い、追い切りを集団実践活動。専用ユニフォームや退散鳥獣等の活用。

「五策　捕って！」

『有害鳥獣捕獲の推進』

猟友会員、実施対との連携協力。

猟師の育成確保。

捕獲個体のジビエ活用による地域活性化。

「六策　食べて！」

『地域の商工・観光資源化』

安全・安心合法的な獣肉処理・加工施設の設置。

各種イベント、交流施設での販売促進。

「七策　里人で！」

『集落・自治会等のリーダー育成確保』

集落の安全、安心な生活環境を整備保全する活動組織の明確化と役割分担。

草と鳥獣対策は生活環境保全整備活動。

「わなを使った捕獲のポイント」

講師・一般社団法人三重県猟友会　倉田　珠文 氏

『罰則が摘要される主な違反行為について』

違反行為の詳細な説明。捕獲に当たっては野生獣の生態や習性を熟知することが重要等々。

「獣害柵の補強・維持管理について」

講師・県農業研究所　鬼頭　敦史 氏

防護柵設置方法や、その急所。設置後の管理、修繕方法など動画を使っての、きめの細かい説明がありました。

獣害対策 JA参画望む声

日本の農山村では、少子・高齢化が進むなか、農業の後継者が激減し、同時に耕作者自身の高齢化も進み平均年齢70歳を超えるような状況が生まれ、耕作面積は減り放棄地が増加しています。

一方で、度重なる鳥獣被害が農家の耕作意欲を削ぎ、耕作放棄を生む要因にもなっています。その耕作放棄地が野生鳥獣の棲すみかとなり、さらに被害を広げるという悪循環ともなっています。

被害の現場集落では被害者がそれぞれ自己流で工夫をしながら対応しています。しかしながら、個人の対応には限界があり、地域ぐるみの被害対策が重要ということはわかっていても、どの様にすれば良いのか?「声がけ」をしてくれる人はいないのか?など、右往左往の状況はつずいています。被害の現場で一番頼られているのは市町村や県の地域機関の職員で、なぜか農家と最も親密な関係にある農協が顔を出さないのが理解できません。

農業協同組合（JA）とは、相互扶助の精神のもとに農家の営農と生活を守り高め、よりよい社会を築くことを目的に組織されたものと認識しています。

特に銀行としてJAバンクは有名で、貯金や住宅ローンなど人気があります。JAバンクは、身近で便利で安心な金融機関で運営上欠かせないとは理解できますが、農協が現在地域で担っている役割本分といえば農家への農業の指導支援体制です。

それぞれの地域の組合員に寄り添い、その目線に立って時代の変化に適切に対応する体制が求められています。

農家は昔のように身近に寄り添った営農指導を切望しています。

野生鳥獣による農作物被害は深刻さを極めており、被害額が年間２００億円。中山間地域の農業は疲弊を極め、営農意欲の減退、耕作放棄地の増加が進む中農家は、一番身近な農協さんの「声がけ」を待ち望んでいます。

今後は、農家、行政、農協が三位一体となり害獣の出没状況や予防の周知徹底を図り、三位一体で情報を共有し

被害防止のための営農指導などを、地域農家は期待し待ち望んでいます。

イノシシ掘り起こし 溜め池の堤体管理

イノシシによる被害は各地で深刻さを増しています。

被害には農作物被害や畦畔破壊が主であったのが、近年では人身被害や道路法面破壊など生活基盤にまでもその被害が及んでいます。

水田と山が混在する伊賀地方はイノシシの生息密度が高い地方なので注意が必要です。

昨年7月の西日本豪雨では32か所の溜め池が決壊し、多数の犠牲者が出ています。

三重県下では９．５６９カ所という多くの溜め池がありますが、その多くは江戸時代の造築で老朽化が進んでいます。南海トラフ地震や近年の異常豪雨を想定するとき、イノシシ掘り起こしが原因での堤体決壊が心配されます。溜め池の堤体は刃金土を中心に土を盛り上げ強固に造られていて、簡単には決壊しない構造になっていますが、「蟻の一穴」、イノシシの掘り起こしが、堤体の弱体化を招き、決壊の原因になるということは十分考えられます。

近年、宇陀川水域では農業用水は宇陀川からの取水が可能になり多くの溜め池は使われていませんが、溜め池には農業用としての役割がある一方で、防火用の水源、洪水防止、水源涵養、更には、さまざまな生物の生育場所などの多面的な役割を担う地域の大切な施設でもあります。

溜め池の堤体は雑草や樹木で表面浸食を防いでいます。その中でイノシシを誘因する植物があるか？ないか？を判断することが堤体を護る上での条件になります。イノシシは雑食性ですが、主食は植物で特にタケノコ・クズの根・シダ類など地下に結実する根茎植物を好み掘り起こすので、堤体の弱体化に繋がります。堤体にはこのような植物がないよう管理することが重要になります。また、樹木は深く根を張るので大径化すると風で堤体が緩み決壊の恐れがあります。イノシシの胃の内容物を調査したところ、その約６割の胃の中に動物質の食物が検出され、イモリ、カエル、水生昆虫、巻き貝などが採食されており、水飲み場やぬた場として利用される場所が餌場としても重要であることが明らかになっていて、人間を警戒する必要のない山奥の溜め池などは絶好の生活場所となります。雑食性であるため、ミミズや昆虫の幼虫などの土壌動物を狙い一匹でも見つけると探しつづけ、とてつもない大きな穴を掘ります。土壌昆虫を発生させないことも重要なことになります。

イノシシ掘り起こし決壊
矢川で

「堤体管理の目の付けどころ」

『土壌昆虫を発生させない』。

また、楽に餌にありつける場所や、方法をを覚えたら人馴れが進み対策が益々困難になります。

「人間は怖いもの」

「人里に近づくことは危険」であると教育することが肝心です。

B群の出没情報は依然として入ってきません。サルの出没情報は対策上不可欠です。

地域の皆様方のご協力をお願いいたします。

『根茎植物の除去』。

『植生がイノシシを誘引する』ということを念頭に。

チョット一服

土壌生態系・陸上生態系

土の中の動物といえば、ミミズ、アリ、モグラがよく知られています。地上と同様、地面の下にも弱肉強食の世界があります。土のプランクトンといわれるトビムシはダニに食われ、ダニはカニムシの餌食きになり、カニムシはムカデに襲われる。そのムカデもアリの共同作戦には負けてしまう。これも土の中の生物群集のバランスを保つために必要なことなのです。

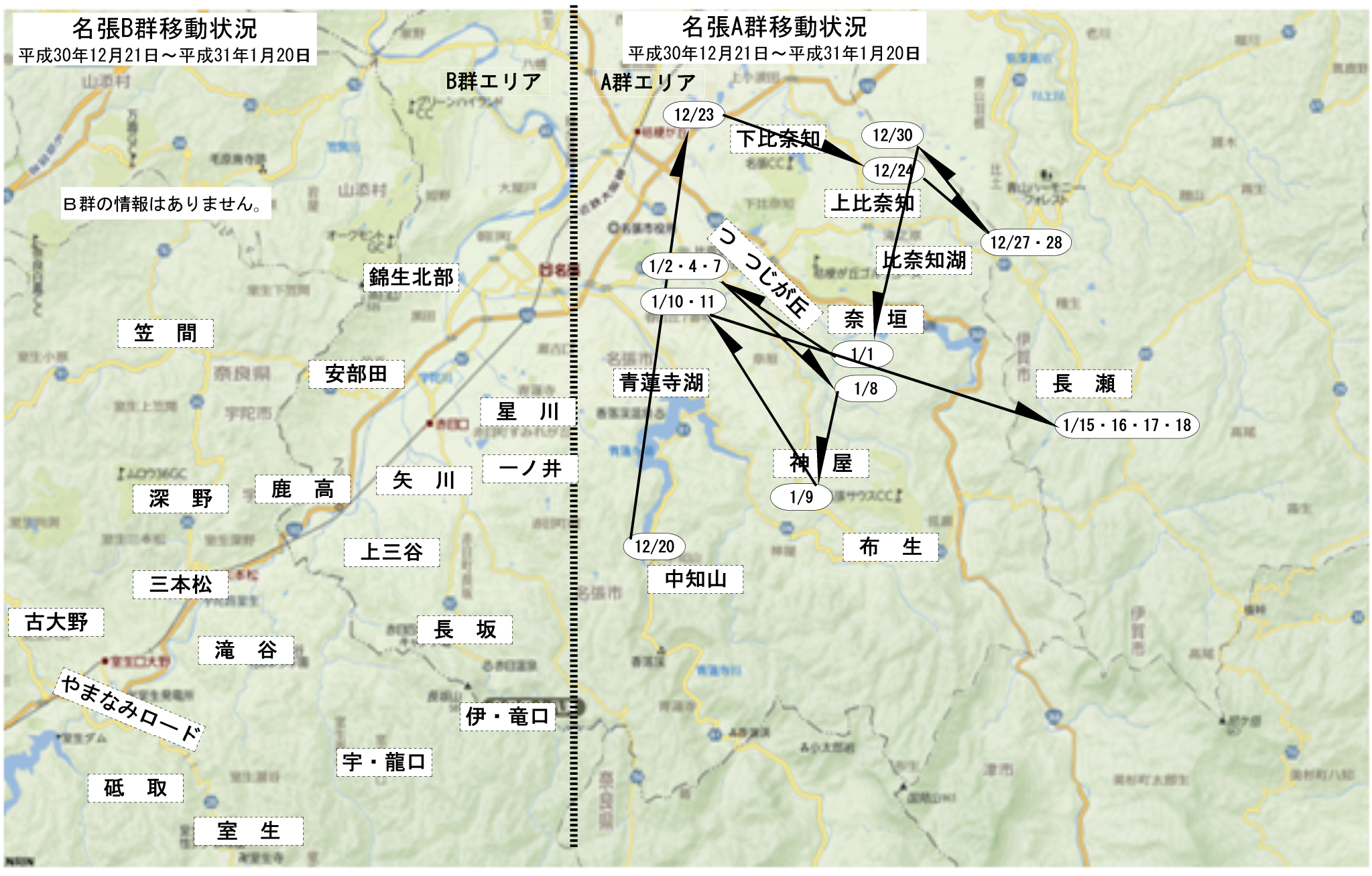
ミミズは落ち葉を食べるときに大量の微生物を飲み込み窒素、リン、カリウムなど排泄します。これが豊富な腐植土のもとになるのです。このようなな土の中で行われる食物連鎖を土壌生態系といいます。

モグラとミミズの戦いのなかで土壌生物と陸上生物の食うか食われるかの戦いも起こります。モグラの主食はミミズで野菜をかじることはありませんが、モグラのトンネルに野ネズミが住み着き、その野ネズミが白菜の根をかじって枯らします。その野ネズミを狙って野良猫が毎日通い、イタチは巣を作り、夜にはフクロウがネズミを目当てに飛んできます。

このような食物連鎖の中で、バランスのとれた生態系が構築されているのです。

サル出没状況

サルは食べ物が少ない冬は、木の実だけでなく木の皮や種子なども食べて暮らします。

冬から早春にかけて、山の餌が乏しくなるため、他の季節より大胆に農地や集落に出没します。さらに、日当たりがよく暖かい場所や餌が簡単に入手できるような特定の場所を中心に生活するようになります。餌を無くし、集落へ依存させないことが必要です。

一度でも美味しい餌にありつくと、その味を忘れられず危険を顧みず、どんどんと里へ下りてくるようになります。